



ミンガラバー

認定 NPO 法人
 日本・ミャンマー
 医療人育成支援協会
 〒700-0815
 岡山市北区野田屋町2-4-18
 TEL: 086-224-0102
 FAX: 086-221-2554
 URL: http://www.mjcp.or.jp



鉄筋の柱が立ち上がった学校建設現場で子供たちに囲まれ、学校名の入った銘板を手にする富安医師(左)ニエヤワデイ州ニナウン村

ミャンマーで見た、考えた



バゴダの前で全員記念撮影。このバゴダは最近、地元の翡翠収集家が翡翠を使って建立し、新しい観光地になっている「マンダレー」

ミャンマーへ昨年12月、岡山学芸館高校(岡山市東区、森健太郎校長)の当時の1年生9人が研修旅行に出かけた=前号掲載。全員が医療系への進学を目指しており、生徒たちは診療所を見学し、自閉症児の施設を訪問、また現地の高校生と交流した。帰国後、研修体験の感想文を綴り、同行した協会の岡田茂理事長に寄せた。その中から2編(抜粋)を紹介する。

岡山学芸館 高校生 研修旅行記

戦争を正しく理解すること

2年 杉本祥太郎

ヤンゴンにある日本人墓
 地は3500坪の土地に大小さまざまな慰霊碑や墓石、墓碑が並んでいました。その一番奥には、ひととき大きな大理石の礼拝所がありました。始めは正直、沢山ある観光地の一つという軽い思いで

古くからあった日本人墓地を今のかたちに作り替えたのはビルマ戦線で生き残った方々です。彼らにとって、血を流したこの地に再び戻ることとはとてもなくつらかつたと思います。異国で倒れた戦友の魂を鎮め、やがて来たのは流した血でつながった者への感謝と自分たちは今、幸せに生きていることを伝えたいからだと、思います。かつて1万人程いた戦友

会の会員が1000人を切っているそうです。ある人の言葉に「本当に死ぬということは人に忘れられること」というものがあります。ビルマで戦った人々を本当の意味で死なせないために今、私たちができることは戦争を体験した人々から話を聞き、戦争を正しく理解することです。そして、2度と戦争を起させない、という思いを持ち続けるべきです。

子供たちの笑顔を守る仕事を

2年 飯塚 朝葵

ミャンマーでは、手術が必要とわかって、高額な費用のため手術が受けられない人が沢山います。交通事故の死者の数が非常に多いというの大きな課題と感じました。そして、手

術を受けられても社会福祉が不十分で、その後の暮らしが大変なことも問題とされています。

そんな医療現状をみた私にとって、日本人の吉岡秀人医師が運営する「ジャパ

ンハート」の活動を、マンダレー郊外のワツチエ病院で見学した時はとても感動しました。無料で手術を受けた子供たちがボランティアの日本人看護師たちと笑顔で過ごす様子が魅力的に思えました。子供たちと一緒に塗り絵していると、私の名前を呼んでくれました。それが今でも一番の思い出です。

でも、一般的には子供たちが病気に苦しみながら手術を受けることがとても難しいのがミャンマーの状況です。このことを知った私にいったい何ができるのか。日本の「国境を越えた医療」が沢山の命を救っていることを知り、将来、この子供たちの笑顔を守るような仕事をしたい、と思うことができました。

サイクロン禍の村に小学校

東広島市の富安医師 寄付



大河エーヤワデイ川支流の河口近く村に、協会賛助会員の広島県東広島市の医師、富安基晴さんが小学校

2008年にミャンマーを襲った巨大サイクロンで、海に近い低湿地のニナウン村は大きな被害を受けた。人口約200人のうち155人が死亡、小学校も丸ごと流された。その後、避難していた村人も徐々に村に帰り、現在は住民約180人。小学生が42人いるが、

通う学校はなく、学校の再建が待ち望まれていた。

新しい小学校はまだ建設中だが、3月30日に贈呈式があり、富安さんはヤンゴンから6時間、車とボートを乗り継いで出席した。校舎は鉄筋レンガ造りで、サイクロンが襲来しても壊れないようにできており、村民の避難場所になる。建設

にあたって村民は労力奉仕をし、街から鉄骨やセメント資材をボートで運ぶなど協力している。

学校名は「ノアリア小学校」。富安さんの4歳になる双子の娘、望彩(のあ)、倫彩(りあ)ちゃんにちなんで名付けた。富安さんは贈呈式で、教育の重要性に触れた後「2人の娘が成人してこの地を訪れ、日本とミャンマーとのかかわりを思い起こしてくれれば嬉しい」と挨拶した。村民は総出で歓迎した。

小学校の開校は6月で、とりあえず先生1人で授業はスタート。1年後には公立小学校となり、国から教員が派遣され、教材も配布される。

寄付小学校3校目

協会を通じてミャンマーへの小学校寄贈は、西山央子理事の「あかね・コンザウン小学校」、NPO法人地球元気塾(東京)の「地球元気塾・チャウス小学校」に次いで3校目。

各地で医療支援活動

協会の岡田茂理事長をリーダーに岡山大学を中心にした医師らが1月、ミャンマーを訪問した。総勢30人。それぞれの専門分野の医療支援活動を各地で繰り広げた。

岡山大中心に30人

年初の恒例行事になって 横田憲治教授(細菌学)が いるミャンマー医学研究大 会のシンポジウムでの講演 は岡山の6人。岡田裕之 教授(消化器内科)、杉原 雄策助教(消化器内科)、 教授(人間生態学)は環境 汚染による人間への影響、



現地の医師へ形成手術の指導＝ヤンゴン総合病院

シンポ■手術指導■検診

また松川昭博教授(病理学)は岡山大学の医学教育について講演した。 協会理事の木股敬裕教授ら岡山大形成外科中心のグループはヤンゴン総合病院とネピドー総合病院の2か所にわかれて手術指導をした。協会理事の笠井裕一・三重大教授ら整形外科のグループはモラミヤイン総合病院で、また脳外科の小野成紀・川崎医大教授らはヤンゴン総合病院で手術の指導に当たった。 岡山大口腔外科の水川展吉講師と山近英樹講師はバゴー総合病院で口腔がん検診をした。約40人を調べ、口腔がんや前がん症状の人が見つかった。この検診には口腔外科医でもある協会理事の永山久夫・岡山プラザホテル社長も同行した。

再訪 患者、年間3万人超 あかねクリニック



ヤンゴン郊外のカラウチャック村にある「あかねクリニック」に1月14日、寄贈者の協会理事の西山央子さんが9年ぶりに訪れ、クリニックの活動状況などをみた。 2009年9月の完成式の時はこの村は水路が唯一の交通手段で、出席者は小舟で参加した。今は新しい道路ができ周辺地域と結ばれ、村の戸数も約300から500に増えた。 診療所の患者数が2017年は31,730人になり、周辺も含めた地域の医療中心となっていた。病気が下痢症、糖尿病、高血圧や結核が多かった。 医師は巡回だが看護師、助産師ら7人が常勤でいる。その宿舎が近くに欲しいというのと、水を確保するタンクの設置の希望もあった。

協会だより ヤンゴン第2医大に 骨髄移植センター



エイエイジ教授

岡山大で研修の医師

かつて岡山大学医学部で学んだヤンゴン第2医大の学のエイエイジ教授(血液学)が中心になって、ミャンマーで初めての骨髄移植センターが同医大に開設された。1月8日の開設式に岡田茂理事長が招かれて出席した。

4期生20人始業式 あかね基金

エーヤワディ管区のチャウンゴンで4月2日、准助産師を目指す20人の始業式があった。 西山央子理事が設立した奨学制度「あかね基金」を受ける4期生。半年間、勉強して准助産師の資格をとる。この奨学制度は2015年にスタート、5年間に毎年20人ずつ計100人の准助産師を育てる計画。

「自信つき、やっつけていけそう」

初のPET-CT 医師ら岡山で研修

がんの早期発見に威力を発揮する最先端の医療機器「PET・CT(ペット・シーティ)」がミャンマーで初めてヤンゴン総合病院に導入され、医師ら2人が協会の招きで3か月間、岡山で研修を受けた。 同病院医師のチャウスウィンさんと技師のテッサンチョウさん。昨年10月から12月まで岡山大学病院放射線科(金澤右教授)と岡



PET・CTの前で、有岡さん(左)とチャウスウィンさん(中)、テッサンチョウさん(右)岡山画像診断センター

山画像診断センター(岡山市北区、加地充院長)で画像診断方法と機器の操作法、メンテナンスをそれぞれ勉強した。 指導に当たった同診断センター画像技術部長の有岡匡さんは「2人とも驚くほど熱心で、知識と技術の吸収が速かった」と話す。研修を終えた2人は「お陰で自信ができました。十分やっていけそうです」といって

引き続き導入 協会に研修依頼

帰国した。 PET・CTは病変の活動状況を見るPETと、臓器の形や場所をみるCTの特徴を組み合わせた検査。がんの早期発見や再発・転移を1回の検査で調べることがができる。 同病院はミャンマー健康財団が運営するクリニックと同じ敷地内にあり、妊婦検診に利用されていた。

妊婦検診に利用 北村記念産院 クリニック

ミャンマー唯一の世界遺産「ピュー古代都市群」があるピュー市に三重県伊賀市のニチニチ製薬が寄付した「北村記念産院クリニック」が開院して丸1年の4月3日、同製薬の嶋田貴志さんが訪れた。

編集後記

「今の若者は」というのは禁句と心得ながら、その行状について口走ってしまいます。身勝手だ、辛抱しない、礼儀知らずだ…。この半面、頼りがいを感じたり、優しさに触れたり、鋭い感性にドキとさせられたりすることがあります▼岡山学芸館高校生のミャンマー研修記を読んで感じたのはもちろん後者です。掲載の2編からは平和への強い希求、進路への固い決意が伝わってきました▼他の7編は紙面のスペースがなくて、紹介できませんでした。それぞれにミャンマーでの体験が若い世代らしい目で綴られていただけに、申し訳ありません。(西崎)